

生演奏と配信、その長短

今月スイスではライブ配信が重なった。同じ演目を初演時の生演奏とライブ配信で観る機会に恵まれたので、その長短をレポートしたい。

チューリヒ歌劇場のシュネーベルト《冬の旅》オーケストラ版パレエ付きは、2018年の初演時にスタランブルシヨットでレポートしたが、今期8回予定されていた再演は2月13日のみ無観客で実行された。そしてオンライン配信との相性の良さに驚いた。初演時にはハンス・ツェンターによるオーケストラ版の現代曲的タッチと、視覚化された完全な孤独が与える衝撃に、湯当たりのような疲労感を覚えた。第2キヤストのテノールの声に甘さが足らなかったのも一因かもしれない。

今回のストリーミングでは、まずダンサーの細やかな動きや表情がズームアップされるため、臨場感を伴って詩的に語りかけてくる。マイクを通すと楽器間のバランス感が生演奏と違ってしまふのだが、それがツェンター版の「毒」を消し、細部に散りばめられた「音の舞台装置」が際立って情感もあふれる。今期の指揮者ベンニヤミン・シユナイターの手腕もあるだろう。そして第1キヤストのマウロ・ペーターは温かい声で失意を歌う。コロナ禍の閉塞感とマッチする、ハイ・レヴェルな映像芸術となっていた。ダンサーたちにとつては、10月末から続く2度目のロックダウンで唯一の舞台だということ、表現する喜びに満ちていた。この映像はホームページ www.opernhaus.ch 上で5月14日まで視聴できる。

当歌劇場はその前後にも、7日にはブラームス《ドイツ・レクイエム》を、2月14

日にはグルック《オルフェとユリディス》（ベリオーズ版）新演出を無観客でライブ配信した。前者は次期音楽総監督のジャン・ドレア・ノセタが、舞台奥に置かれたオーケストラ・ピット用の指揮台に乗って指揮し、舞台上にオーケストラ、合唱は観客席か



チューリヒ歌劇場《ドイツ・レクイエム》から ©Monika Rittershaus

ブラームスの深みが出ない。ピッチが下がり気味になっても修正できず、ゆったりしたテンポを取っても重さが足らず、音楽的頂点に到達できない。場面によって移り変わる色彩にも時差があり、再びドラマティックな主題に戻るにも、その「決意」が見

られない。しかし、第2曲の後半からは好転し始め、第3曲で登場するバリトンのコンスタンティン・シユシヤコフは、音を吸ってしまう客席の真ん中で歌うむずかしさにも負けず、高音までみずみずしい声を聴かせた。続くソプラノのリディア・トイシャールは音程が定まらず、声が飲み込まれてしまった。第6曲での女声合唱も響きを上手くまとめ、ブラームスの目指した世界を実現させていた。ここでもシユシヤコフは輝かしい声で、テンポ感やアクセントを駆使してドラマティックに仕上げた。最終曲では疲れが出たのか、音楽的緊張感が緩み、最後の高音で豊かな響きを膨らませることができなかったため、救いに達しなかったのが残念だったが、この悪条件のなかで、ただ演奏する喜びに集中し、よく乗りきったといえる。

ら共演した（写真参照）。男声をバルコニー席に散らばらせ、女声は平土間に、ソリストは歌う曲だけ平土間に入ってくるという苦肉の策だ。その結果、弱声でハーモニーを混ぜるのも、クレッシェンドの到達点に向けて、丸い響きを膨らませるのもむずかしそう、

後者はスイスが誇るクリストフ・マルターラーの演出だが、主役の二人舞台上に終わった。オルフェを歌ったナデジダ・カリヤジナはひどいウィブラートで歌い出しに不安を感じたが、低音で声が収まると本領を発揮し始め、温かい声で好演した。ユ

リディスのキアラ・スケラートも可憐に歌い切った。ステファノ・モンタナーリの指揮は、冒頭でスレたり、オルフェのアリアでも音量を抑えられなかったりしたが、バロック音楽の職人的な音楽作りで台格点だった。

ジュネーヴ大劇場からのメッセージ

2月19日にジュネーヴ大劇場が無観客ライブ配信したモーツァルト《皇帝ティトの慈悲》は、まずストリーミング技術に辟易とした。不鮮明な画像と酷い音質に加え、2度ほどフリーズしてしまった。結果から始めて序曲に戻るミロ・ロウの演出にもうんざりしていると、エキストラを裸にし、心臓を抉り取るので不快感が頂点に達し、視聴をやめようと思ったほどだ。ヴィテツリアを歌うセレーナ・ファルノツキアの前統派歌唱を聴くためにだけ聴き続けると、セストのアンナ・ゴリヤチョヴァも自然な低音が心地よい。プブリオ役のジャスティン・ホプキンスやアンニオのチエチーリア・モリナーリも美声だ。題名役のベルナルド・リヒターも堅実な歌唱を聴かせた。指揮のマキシム・エメリヤニチエフは歌手に合わせすぎて、音楽的緊張感を保持できない部分があった。そのうち演出が、再び不快な残酷性を帯びてきたころ、字幕でエキストラたちの生い立ちが紹介され、彼らは難民だと知らされる。スイス内ではとくに難民が身近なジュネーヴで、彼らが逃げて来た残酷な世界が「蚊帳の外」ではなく、私たちが生きていくのだらう。「私たちがティトの物語を語るように、誰が、誰に、私たちの歴史を語るのだらう」という字幕が心に刺さった。